

位置と環境

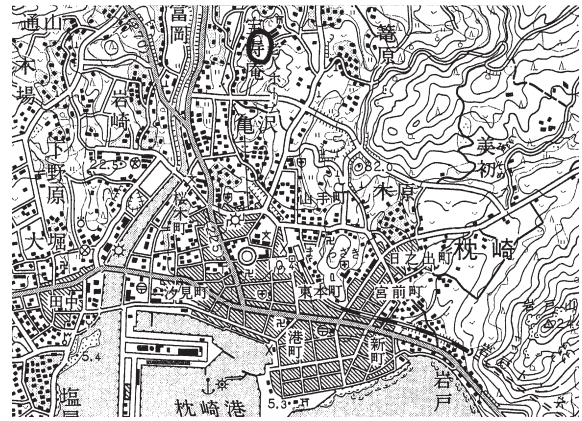
東鹿籠宝寿庵地区にある「妙見の森」の南側，花渡川を西の眼下に見下ろす標高35m前後の高台に位置する。

調査の経緯

発掘調査は特殊農地保全整備事業に伴って，枕崎市教育委員会が調査主体者となり県教育委員会の協力を得て，平成元年（1989年）5月15日～6月14日に行われた。

遺構と遺物

土器は，縄文時代前期末から中期のものが主体に出土した。これらの土器を大別すると5種類となるが，最も多かったのは，枕崎市深浦遺跡で初めて名付けられた深浦式系統の土器である。底部の形状は丸底であり，外面全体と口縁部内面に貝殻腹縁による相交弧文を施し，その上に突帯を貼り付けて文様を描いている。条痕文尖底土器は，底部の形状が尖底もしくは小さな丸底で，ふくらんだ胴部から少しくびれて内湾する口縁部に至り，全面に貝殻条痕を施す。春日式土器は器面全体に文様を施し，上げ底となるタイプであり，四段階に分けた内で最も古い北手牧段階に位置づけられる。また，瀬戸内海地方を中心に分布する縄文を施した船元式系土器も出土している。本遺跡出土の船元式系土器は，角閃石を

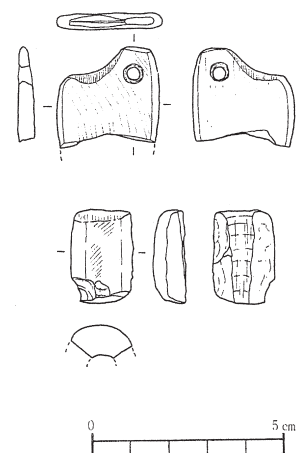


第1図 鞍谷遺跡の位置

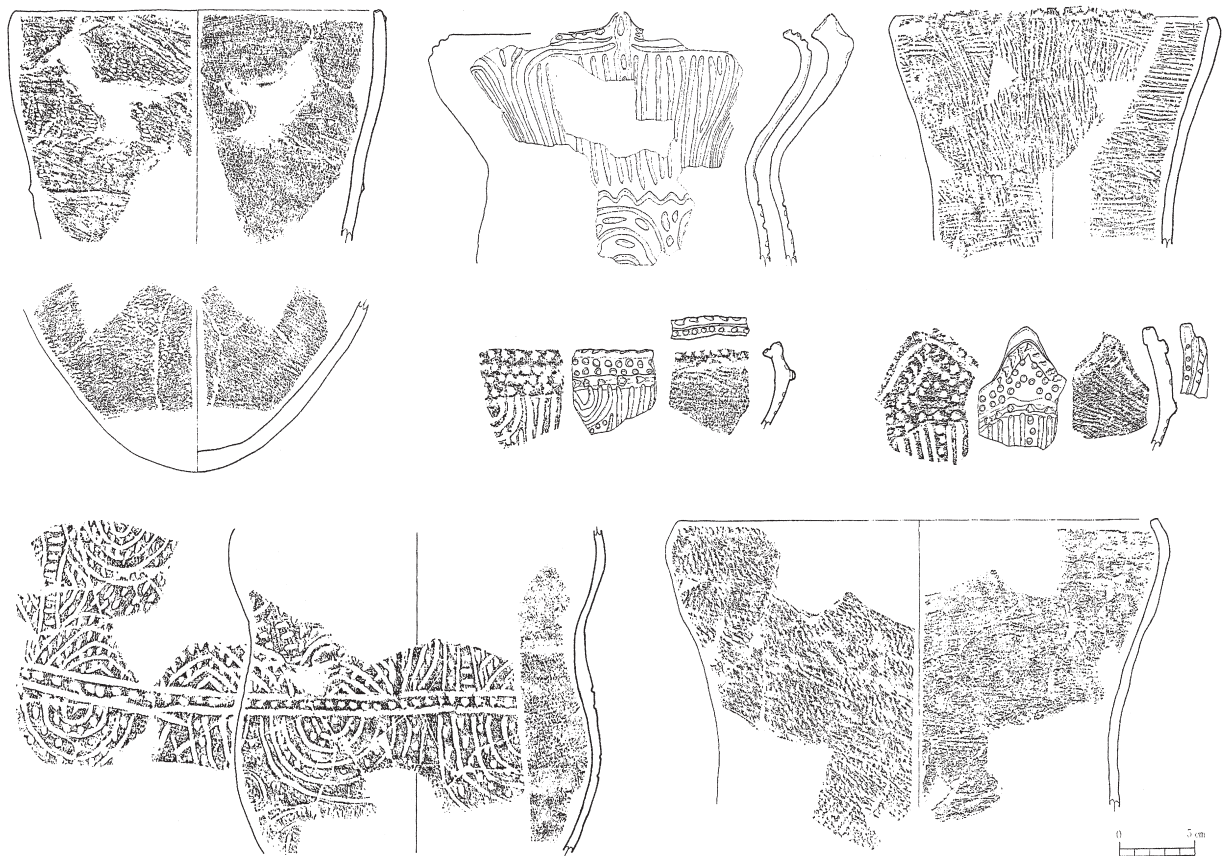
多く含む胎土でつくられており，一目で春日式土器と区別することができる。船元式土器は春日式土器に影響を与えたと考えられており，船元式土器の南九州版が春日式土器と考える見方もある。更に，胎土に滑石を多量に含んだ春日式系統の土器もある。器形や文様構成は春日式土器と同じであるが，滑石を含む点が異なる。滑石は長崎県西彼杵半島や有明海沿岸に分布する石材であり，遠く離れた枕崎で出土したことは興味深い。深浦式系土器と条痕文尖底土器の方がより古く，春日式土器と滑石を含む春日式系土器，それに船元式系土器がその後が続くと考えられる。しかし，底部の形状が，丸底あるいは尖底から急に平底に変わる点に，この時期の興味深さがある。この様に，比較的短い時間幅の中で，胎土の違いも含めて多様な土器が出土することは，土器自体の動きを考える契機となる良好な資料であ



写真1 独鈷状石器



第2図 玉類



第3図 鞍谷遺跡出土土器（1・2 深浦式系土器，3 滑石混入土器，4 条痕文尖底土器，5～7 春日式土器，8 船元式系土器）

る。なお，中期以外に縄文時代後期終末の土器一個体分が出土している。

石器は，独鈷状石器，石鏃，石匙，石錐，滑石製玉，水晶製石器等の多種多様なものが出土している。独鈷状石器は，発見例の少ない特殊な石器である。両端がとがって，中央部に浅いえぐりがあり，全体が多少湾曲しており，長さは18cmである。県内で7例が知られているが，ほとんど採集品であり，発掘品として現存するのは当遺跡の1点だけである。玉類は飾り玉と思われ，水晶製石器は，楔として骨角等の裁断に使用されたと考えられ，縄文時代の石器として貴重なものである。

ここの発掘調査で特筆されるのは，独鈷状石器が出土したことである。近畿・中国・四国で6例，九州で13例しかないことから，日常的な道具ではなく，呪術具としての位置づけがなされている。また，他の遺跡から出土する独鈷状石器は，縄文時代後期の終わり頃から晩期にかけてのものが多くいわれているが，本遺跡では，それよりも大きくさかのぼる古い時期に該当することが分かった。鞍谷遺跡出土

の独鈷状石器は，島根県円谷遺跡例及び奈良県下深川遺跡例に良く似ている。土器についていえば，地元で作られたと考えられる深浦式土器や春日式土器のなかに，瀬戸内海地方の土器が混ざっていることや，土器の胎土及び石材に西北九州のものがあること等，遠く離れた地域との交流を考えるうえで，非常に興味深いものがある。

特徴

東日本の独鈷石に対する西日本に特徴的な独鈷状石器が発掘調査によって出土したのは九州で初めてであり，当時の精神文化の広がりを知る手掛かりとなった。また，玉類の出土も注目される。縄文時代中期初頭から中半にかけて，瀬戸内地方や西北九州との交流を裏付ける土器も出土した。

資料の所在

出土遺物は，枕崎市教育委員会に保管・展示されている。

参考文献

枕崎市教育委員会1990「鞍谷遺跡」『枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書』（6）（東 和幸）